

居永正宏『『産み』を哲学するとはどういうことか』へのコメント

品川哲彦¹

一、主題と本コメントの論点

居永正宏氏（以下、居永と略記）は「産み」を主題とする哲学的研究に着手している。居永によれば、この主題は「哲学の伝統的な考察からは抜け落ちてきた」²が、その理由は、「哲学の中心を担ってきたのは、妊娠・出産を経験しない、『産まない』男たちであったから」³であり、「普遍性を旨とする哲学者も、思索においてジェンダー・バイアスから逃れることはできなかった」⁴からである。だが、居永自身も産まない男のひとりである。したがって、「男性哲学者である筆者が『産み』という主題を考察するための方法論的反省」⁵を試みたのが表記論文の趣旨である。

上述の説明からしても、表記論文を論評するさいの論点は明らかだろう。すなわち、第一に、居永はこの論文においてどのようにしてジェンダー・バイアスを克服しようとしているのか、またそれは十分なものであるのか、第二に、哲学的思索と呼ばれる「哲学的」ということの意味は何であろうか、またその思索の特性はどのようにして担保されるのだろうか、第三に、「産み」という主題はどのようなものとして設定されているのか、その理由は何であろうか、がそれである。以下、居永の叙述を引用しつつ検討して、最後に以上の三点について現時点での論者のコメントを示すこととする。

二、居永の思考実験は、人間における「産み」という行為を適切に描き出しているか

居永は、私たちが次のような生物であったらどうかという思考実験を導入する。すなわち、その生物は人間に似た身体をもち、性別の区別がなく、すべての個体が子宮様の器官

¹ 品川哲彦（しながわてつひこ）。関西大学文学部教授。

² 居永正宏『『産み』を哲学するとはどういうことか』、本号、12頁。

³ 同上。

⁴ 同上、14頁。

⁵ 同上、15頁。

をもっている。そのなかには誕生時点から胚があり、その生物は成人後に痛みを伴いながらその胚を体外に排出する。排出後には新しい胚ができる。「この胎児が十分に健康な状態で産まれてくるには、誰かパートナーと親密な関係を築いて生活を営んでいる必要がある」⁶。産む営みは他者との依存関係においてしかなされず、産まれた胎児はケアを必要とする他者となる。この思考実験によって、居永は、とくに産まない性である男性に産む経験を想像させようとしているのであり、その結果、身体における自己と他者の両義性、他者とのケア関係を重視する自己認識が得られるだろうと考えている⁷。

さて、思考実験のなかで仮設された状況は、その思考実験を案出した論者の暗黙の前提をはしなくも露呈するものである。だとすれば、この思考実験において居永が付与している諸前提のなかに、居永が「産む」という経験を——本人が意識しているのであれ、無意識であれ——どのように捉えているかが示唆されていることになろう。

胎児が健康に生まれてくるための必要条件として親密な関係を築いて生活を営んでいるパートナーを前提しているのは、なぜだろうか。裏返していえば、居永は、親密な関係を築いて生活を営んでいるパートナーがいなければ、胎児が健康に生まれてくることは保証できないと主張していることになるのではないか。しかし、生活をともにしているパートナーをもたない女性が健康な子どもを産んでいる例はいくらでもあろう。なにかここに、居永が暗黙のうちに、一夫一婦制のような家族のあり方を肯定しているのではないかという疑念が生じてくる。

いや、この設定は出産や子育てに他者の協力を要することを主張するためだと、居永は反論するかもしれない。だが、もし、思考実験上の妊娠中の生物が独力では生きられずに他者のケアを必要としているとすれば、思考実験の前提条件はその状況をますます負担の重いものになっている。というのは、居永が仮設した前提では、すべての個体が妊娠中で、しかも出産後にただちに別の胚が子宮のなかに宿るからである。したがって、パートナーもまた、他者のケアを必要としている。もちろん、すべてのひとがケアされることを必要としている存在であり、かつ、すべてのひとが他の誰かをケアしているという関係が成り立ちうることは、ケアの倫理などが主張していることで、私はそれを否定しない。この思考実験では、おそらくパートナー間で出産前後の時期がずれているなら、相互のケアは成り立つのであろう。逆に、その可能性を考えないかぎり、この思考実験は破綻する。

⁶ 同上。

⁷ 同上。

ところが、たとえパートナー間でそのような相互のケアが成り立つとしても、他方でまた、産まれた子どもにもケアが必要である。したがってこの思考実験は、子育てしている者は同時に妊娠中の胎児のことをケアし、かつまた、妊娠中のパートナーをケアするように設定されている。というのも、居永は、すべての個体が妊娠中で、しかも出産後にただちに別の胚が子宮のなかに宿るという強い仮定を採用しているからである。もちろん、現実には、第二子以降の子どもを妊娠中の母親が先に生まれた幼児の子育てをしている事実はいくらでもある。しかしながら、そうしたケースも含めて、親になる者は子育てに没頭するために次の妊娠の時期を調節する工夫をしてきた。それは、人間が妊娠・出産・子育てをそれぞれの人生の一期間として考えて意図的に計画して行っているということの意味している。この事実を、上の思考実験は反映していない。

さらに、この思考実験は出産後に次の妊娠が自動的に開始するように前提していることで、「女性たちは何度も何度も『このからだは私のからだだ!』と言い続けてきた」⁸というフェミニズムの主張を無視している。私のみるところ、この思考実験は産む性をあたかも孵卵器であるかのように描いてしまっており、したがって産む性というよりもむしろ産まされる性、産むことを余儀なくされる性を描き出している。居永自身はこの思考実験の叙述について、それが『女性』にとっては単なる事実の記述なのかもしれない⁹と記している。しかし、上に指摘した点からして、この思考実験を「単なる事実の記述」と受け止める女性あまりいるとは思われない。ひょっとすると、男性の無理解、強い性欲、家の後継者を残すという使命、さらには避妊の有効な方法がなかった等々の条件からつぎからつぎへと妊娠と出産を繰り返さざるをえなかった女性であれば、ここに描かれた状況を自分に近いものと受け止めるかもしれない。だが、居永がこの思考実験をとおして引き出そうとしている結論は、そうした人生を過ごした女性の苦しみではなくて、身体と自己の両義性や他者とのケア関係の必要性である。その結論は、私の理解では、「すべての個体が妊娠可能であるが、ただしつねに妊娠しているわけではない」という前提でも導出できる（ただし、居永の思考実験では、引き出されるべき結論のひとつであるケア関係の必要性はすでに前提条件に組み込まれているのだから、厳密に言えば、思考実験をとおしてはじめて導出されたのでもないのであるが）。したがって、すべての個体がつねに妊娠中で

⁸ ジュディス・ジャーヴィス・トムソン、「妊娠中絶の擁護」、塚原久美訳、江口聡編・監訳『妊娠中絶の生命倫理——哲学者たちは何を議論したか』、勁草書房、2011年、19頁。

⁹ 居永、前掲、16頁。

あるという強い仮定は必要ではない。どうして、居永が強い仮定を採用しなくてはならなかったのか、私には理解できない。

むろん、思考実験は思考実験にすぎない。それはそもそも反事実的である。私の批判は、むろん、そこにはない。私の批判は、この思考実験が人間における「産み」という行為をむしろ歪曲してみせてしまうというその点にある。

三、何をどうすることが思索を哲学的たらしめるのか

居永は「私が他者を産むこと（＝一人称の産み）」を第一の主題に設定し、生物学的には男性には不可能なその経験に替えて、男性が積極的に出産の手助けをする愛媛県大洲市上須戒地区の習俗についての文化人類学の調査を手掛かりとする。そこには、妻の産みの苦しみと一体感を感じた男性のことばや、誕生直後の嬰兒が瞬時にして血色がよくなっていくさまをみて生命の大切さを感じた男性のことばが記録されている。ここに、居永は男性が主体的に産みに関与する可能性をみている。ただし、居永はその経験の可能性から「自動的に哲学的考察が出てくるわけではない」¹⁰と記す。すると、哲学的考察たりうるためには、どのような条件を満たさなくてはならないのだろうか。

居永の説明はおよそこうである。「思考実験とその前提となる『思考実験』も、実はその思索を行っている哲学者の経験上のバイアスに縛られている。したがって、もしそのバイアスを超えて経験を広げることができれば、それに対応して思考実験や思索の可能性も広がっていく。（中略） そうだとすれば、哲学的営みが進むべき方向の一つは、このような意味での『経験』の可能性を拓いていくことにあると言ってもいいだろう」¹¹。その経験の拡大には男性の「産み」の経験を「記録した文献等の資料」の読解も含まれ、「自らの個人的体験を踏まえたうえで、そこに留まることなく、それらの蓄積されてきた文献を通して考察を重ねることで、そもそも『産み』とは何なのか、という問いへと考察を進めることが可能になるのではないか」¹²。

率直に言って、この説明はあまりに素朴である。個人的体験と文献読解と考察によって営まれる思索というだけなら、文化人類学にも社会学にも歴史学にもその他多くの分野にもあてはまる説明ではないか。いったい、哲学とその他の学問とを分ける徴表は何だろう

¹⁰ 同上、20 頁。

¹¹ 同上、21 頁。

¹² 同上、22 頁。

か。他の分野が客観性や実証性を重んじるとすれば、哲学は「個人的体験」を含むということがそれだろうか。だが、それなら、哲学者の個人的体験とその他の人びとの個人的体験とはどう違うのかを答えなくてはならない。その違いを哲学的思索の有無をもって答えれば論点先取である。それとも、哲学はそれがめざす目標、「そもそも『産み』とは何なのか、という問い」によって他の学問と識別されるのだろうか。だが、概念の明確化それ自体は他の学問にも必須である。ひょっとして「そもそも」のところが哲学っぽいのだろうか——つまり、特定の学問ないし科学の分化した視点による拘束を離れた本質論を展開するという意味で。だが、そうなら、たとえば文化人類学の調査をどのように解釈することで哲学的思索に転化していくのかについて答えなくてはならない。結局のところ、哲学的思索たりうる条件や特性について、表記論文が説明できているとはいいいがたい。

最後に居永は、「わたし」ということばと「妊婦の私」との乖離を指摘して「ことばが不足しているのです。概念が浅すぎるのです」という森崎和江を引用し、「産み」という主題の言語化の困難をあらためて指摘したうえで、「単なる体験談でもなく、逆に既存の哲学理論を天下りの的に当てはめるのでもない、経験と哲学的考察がお互いを変容させながら、『産み』の輪郭をそのまま捉えることができるような、『深い概念』を生み出すことが、私たちに求められているようである」¹³と結論している。

私は、哲学の論文は（他の分野の学問でもそうだろうが）論者が責任をとる文章で構成されていなくてはならないと考えるひとりである。そういう考えからすると、このまとめ方は不満である。なぜ「私たち」と一般化するのか。なぜ「ようである」とぼやかすのか。「産み」の哲学という主題を選んだのは居永自身である。したがって、まずは居永自身が「深い概念」を生み出そうとしているその試みの成果を報告すべきではないか。森崎のいう「わたし」と「妊婦の私」の乖離は、おそらく、居永が思考実験から導出しようとした身体と自己の両義性に関わることだろう。それならますます、ここで（じゅうぶんに展開できないとしても）森崎のこの表現の分析にとりかかるべきではないだろうか。

四、「産み」のなかで分娩それ自体にとくに着目するのはなぜか

居永は「哲学的な問いとしての『産み』は、肉体的な出産の瞬間やその前後の一定期間だけに関わるものではなく、究極的には人間の条件としての『産み』を考察するものであ

¹³ 同上、24頁。

る」¹⁴としつつ、『産み』の特権的な瞬間として出産」¹⁵に焦点を合わせている。これは居永の研究の新たな着眼点として評価してよい。

ただし、居永はそれをする根拠づけのために、死についての哲学的分析が「理性や意識中心の哲学では、『産み』だけではなく死も『意識の虚無化』のように観念的に捉えられしかなく、本来的な『死』を捉えることもできない」¹⁶と注し、あるいはまた、「死と同じ重みがあるはずの『産み』」¹⁷というふうに「産み」と「死」を対比している。この対比は成り立つだろうか。死が死ぬ本人の死を意味する以上、それと対比されるのは誕生である。これにたいして、「産み」は産む側の体験であり、(帝王切開における全身麻酔等の場合を除いて)意識を失わない。それどころか、いきむことには強い意志が必要であろう。ちなみに、死を「意識の虚無化」と捉える把握は必ずしも「観念的」であるとは断定できない。死んでゆく本人の一人称的視点からはそうとしか捉えられないのかもしれないからだ。だが、居永はそれとは別に「本来的な」死があると語る。それは論理の赴くところ、死んでゆく本人以外の者の視点から把握された死であろう。すると、その本来的な死と「同じ重みがあるはずの」産みもまた、産む本人以外の者の視点から把握されたそれであろうか。しかし、前述のとおり、居永は一人称的視点から体験された「産み」を重視していた。だとすれば、死と「産み」とを対比するのは適切とはいえないのではないか。

とはいえ、「産み」と誕生が不即不離であることはたしかである。すると、問題は、「産み」の哲学が最も広い射程において何から何までを、どのようにして含むのかという点にある。第二節に記したように、妊娠・出産・育児という一連の行為のなかに位置づけられるほか、「産み」という親の行為のみならず、子どもの誕生も含むとすれば、親の視点に焦点をあてた分析と子どもの視点に焦点をあてた分析とをどのように結びつけるのかという点もまた今後の課題だろう。

五、コメント

以上から、一節にあげた論点について、現時点での私見を述べよう。

居永がジェンダー・バイアスについて意識していることは、本文中の表現や註 14 から窺える。だが、産む性を産むことを余儀なくされている性のように描き出したその思考

¹⁴ 同上、17 頁。

¹⁵ 同上、18 頁。

¹⁶ 同上、脚注 3。

¹⁷ 同上、14 頁。

実験をみると、そのように産む性を描いてしまうような偏向が居永のなかにあるのではないかと疑われる。「男性哲学者が日常的なジェンダー平等の感覚を養うことと、それに支えられて『産み』を哲学的に把握することは次元が異なるはずである」¹⁸という居永の説明は論理的には間違っていない。しかしまずは、「産み」の哲学の研究を標榜する論者が前者の条件をどれほど満たしているのかについての挙証が確保されなくてはならない。それがあいまいなまま「次元が異なる」という理由のもとに後者に進んでいるのではないかという疑念が晴らされなくてはならない。

哲学的思索の満たすべき条件ないし性格づけについても明らかにされたとはいえない。「産み」の哲学の意義と必要性を読者が理解したあとで、読者は、その執筆者がどのようにしてそれを達成できそうかという見込みに目を向ける。そのさいに、経験と文献解読とを通した考察を積み重ねるといふ説明では説得力が弱い。

「産み」という主題の内容の精緻化については、四節に記したことに尽きる。

せつかく新たな主題を発掘したのだから、居永の今後の健闘を望む。

¹⁸ 同上、14頁。